

2024 年度ヤング・ポートフォリオ選考会を終えて

選考委員：今 道子、百瀬俊哉、瀬戸正人（副館長）

司会：小川潤子（フォト・コーディネーター）

百瀬：今回 YP の選考会は初めてで、楽しみと同時に不安もありました。自分も写真を撮るので、それを評価する怖さと言いますか。いろいろ拝見して、まずはプリントの力というのをすごく感じました。一次のデータ選考で見たときには、つかみどころがないなと思った作家さんでも、プリントを前にすると思考が働くというか、心が動くというか、そういう雰囲気があって、今回良い機会を与えていただいたと思っています。

今：選考会は2回目なので少し冷静に見ることができ、作品によっては、自分と近い感覚を感じたり、逆に全然違うパワーに触発されたりしました。私はゼラチン・シルバー・プリントを続けているので、そんな作品は懐かしく見るのができたし、そんなことにこだわらないで、自由に素材を使って表現した作品も新鮮でした。

瀬戸：YP の選考で一番楽しみなのは、35 歳以下の若い人たちの実験的な写真とか、みんなそれぞれ頑張っているけれども、全て皆さんの“初期作品”になるわけですね。初々しさもあり、荒々しさもあり、不完全なところが実に魅力的だといつも思っています。

小川：選考委員の先生はそれぞれ全く別のスタイルで作品を作っていらっしゃいますが、意見の対立はなかったですか。

今：写真家として、作品は全然違いますが、良い作品はわかるのは共通していると思います。写真だけでなく、小説でもアートでも、良いものは見抜けるのではないのでしょうか。

百瀬：作家として確立されているわけですから、そのポジションから、違う分野の写真を見るということであれば、意見の相違はなかったと思います。

瀬戸：好き嫌いで決して選んでいないということなんですよ。良いかどうかという視点に立てば、共通した眼はあるわけです。

プレゼンテーションの形

小川：単写真で多数応募された方と、組写真（シリーズ）の方がいらしたのですが、作品を提示

する際に考慮すべきことがあれば。

百瀬：ケースバイケースだと思います。ただ、単写真を何点か応募していた中でも、作家の視線は共通している作品が多かったように感じました。自分の視線をもう少し整理して組んでいくことによって、伝えたいことがより相手に伝わりやすくなる。そのあたりは選考の過程で丁寧に拾われていったと思います。

瀬戸：私については、そういう見方はしてないかもしれない。さらに言えば、組写真にしたことで何かまだはっきりとしていないその作家のことが見えてしまうような場合もあって、あまり頑張る組写真にしなくてもいいんじゃないか、ということも感じました。無理やり組むことによって、マイナス面が見えることがありますね。

今：シリーズでも、シリーズでなくてもあまり気にしません。作品を撮っているうちに、自分の視線が身について、凝縮されて、作品がつながっていくように思います。

小川：いろいろなサイズの作品が混在していましたが、サイズを決めるときのアドバイスはありますか。

百瀬：全体を通してもう少し大きいサイズで見たかったなという作品がいくつかあったのは事実です。逆に大きくて、もう少し小さくしても良いのではと思ったのもありました。ただ、それは私の思いで、作者の思いと一致するかどうかはまた別の問題ですから、まずは自分で納得のいく形というのが基本だと思います。

今：自分に合った定番のサイズは揃えた方が良いですが、展覧会ときは、展覧会の場所や、作品のイメージでサイズを決めた方が望ましいです。

瀬戸：こんなに大きくしなくていいのでは、という写真が二、三ありましたね。そこはもう少し考えるべきかと思います。逆に、これをもっと大きくすればいいな、という写真もありましたし。

ドキュメンタリー写真のあり方

小川：昨今、ストレートな、いわゆる報道写真で物事を伝えるということよりも、コンセプチュアルなドキュメンタリーというのが主流になってきているようですが、今後のフォトジャーナリズムの役割についてお考えがあればお聞かせください。

百瀬：今、現場からすぐ情報を伝えるとなると、映像や SNSの方が早い。写真はもちろんそれもできますが、過去を振り返るということも可能です。ですから、そういう中で、写真を使って自分の考えていることを表現していく、ということができるようのもまた写真の力だと思うので、それは写真の使命の重要な要素だと思っています。

小川：分野が違うかもしれませんが、今先生はフォトジャーナリズムのあり方について何か？

今：現実を撮った強烈な写真によって、社会や人を動かすこともできると思いますが、今回、ウクライナのセルゲイ・メルニチェンコの作品を観ていると、美しさもあり、自然に作品を受け入れつつ、そこに現実の痛みや悲しみを感じ取ることができたように思います。そこに住む普通の人たちの作品が、こんなに人の心を動かす力を持っていることに驚かされました。

生成 AI

小川：応募作品の中には、自然と人工の融合のようなカイヤ&ブランクの作品もあって、最後まで何だかよくわからないけれど凄いという意見が出ていました。見る側が作る側の策略にはめられた、それが作家の意図なのではないかとおっしゃっていたと思います。そこでちょっと考えたのは、今の時代に写真の「真」とは何なのだろうということだと思うんです。写真が生まれて来年 190 年を迎えますが、写そうとして写してきた写真の「真」と、生成 AI が作る写真、画像の違いはどんなところにあるのでしょうか。

百瀬：もう既にそういう画像は見ていますので、そういう時代だなというのはまず感じています。現状では、他の人が撮った写真や、出どころがわからないものを組み合わせることが多いと思うのですが、僕の中のひとつの線引きとして、自分の作品として発表する場合は、「自分が撮影した」と決めたルールがあるものですから、もし私が AI を使うとしても、自分の作品を全て読み込ませて、その中から新たなクリエイティブなものを作るというのがあるかなと思っています。難しい時代だとは思いますが、逆に自分の作品として発表するときには、そういう形であればいいかなと考えています。

小川：瀬戸先生、もし YP に AI の作品が応募されてきた場合はどうでしょう。

瀬戸：難しいですね。何を以て写真と決めるか。アートとは何かという話なのですが、AI が出てくる前のことですけれども、ある文化人類学者は、アートには 3 つの定義があり、ひとつは、人間の脳の問題であると。チンパンジーにはアートは作れない。チンパンジーと人間は 98% DNA が一緒だそうですが、これが決定的な 2% で、彼らには芸術や宗教は生み出せなかった。だから

芸術というのは、血の通った人間の脳の問題なので、そこに留めるべきじゃないかと僕は思っています。AIも人間が作ったものですけど、勝手に作り始めたならば、それは我々の領域じゃないのではないかと思いますね。

小川：フェイクかどうかを見極めるのは難しいかもしれませんが、写真は時間も止めるし、記憶に残るし、それこそ歴史も記録できるし、フランスのバスティアン・デシヤンの作品のようにエネルギーも伝わるし、情熱もある。

瀬戸：個性もある。人間を感じる。

YPの意義

小川：百瀬先生はYPの初年度に作品が収蔵され、YPを卒業したYPOBの一期生でもありますね。1995年に応募したときのことなど、ご自身の体験をお話いただけますか。

百瀬：約30年近く前に応募をしたわけですが、そのときは正直、美術館に収蔵されることの重さというのをここまで深くは考えていなかったと思います。年々時間が経って、歳を重ねていくうちに、すごく自分の中で重く受け止めるようになって、そこにだいたい救われてきたなという感じがしています。いろいろな公募がありますが、YPは特殊で、選考していてわかったのですが、かなり自分の世界というものを持ってぶつけてくる必要があるなと思いましたので、それに向けて作品制作を楽しんでもらいたいというのが最も強く感じた点です。

今：最初の頃は、展覧会に目が行っていて、美術館に収蔵されることに、あまり関心がなかったのですが、作品が手元を離れ、評価され、きちんと管理され、保存されることは大事なことと感じています。若い頃の作品はエネルギーや新鮮さがあって、今になってはできないことなのでから貴重です。

小川：YPでは、どの選考委員がどの作品を評価したかがわかるように、作品に付箋を付けて返却したり、去年からは僅差だったファイナリストの方々にも応援メッセージを送ることを始めました。そういう意味では、応募者に勇気を与えてくれるプログラムだと思いますが、YPはどういうところに一番重きを置いているのでしょうか。

瀬戸：選考に通らなくても、付箋の付いた作品が、応募した作家に届くわけですね。それがすごく嬉しいと言うのです。この写真が今道子さんに選ばれた、とか。そのメッセージは確実に伝わったということですよね。それを聞いて、僕も本当に嬉しかったです。

百瀬：年齢が 35 歳というボーダーがありますから、いろいろな実験的な作品もあったと思います。「これは写真？」という部分もあったと思うのですが、僕が見ていて面白いと感じたのは、彼らが「写真」を選んで応募しているというところ。絵を描いて応募してもいいわけで。彼らが写真じゃないといけないと思う理由があるはずなので、それも聞いてみたくなりました。それぐらい多様な応募作品が集まっている公募展なんだなと感じました。

小川：オリジナル・プリントを展示・保存するため、プリントにこだわるというのが美術館のポリシーのひとつですが、それも多様化していく可能性がありますか。

瀬戸：もうデジタルの時代に入って長いし、これからその先にまた技術革新があるでしょう。そうしたら「カメラって何？」ということにもなりかねないし、そこは見る側がもっと踏み込んで見ていかないといけない時代が来ると思いますね。写真の歴史もずっとその進歩だったと思うのです。

写真とは？

小川：200 年に満たない歴史ですが、撮る人、見る人のためにさまざまな手法が作られてきました。最後に、先生にとって写真とは何ですか？

瀬戸：写真って……一番わからない質問ですね。僕にとっては、撮らなきゃいけない写真があって、そのために生きているということですね。自分にとって撮らなきゃいけない写真を撮る。それはみんなそれぞれあって違うものですけど、そういうことかなと個人的に思います。

今：魅力を感じるものを、カメラがとらえて、時間を止めて、保存できる魅力です。

瀬戸：思っている以上のものをカメラが写してくれる、という魅力がありますよね。

百瀬：僕は本当に一緒に生きているという感じです。いつも写真がそばにいたので、どんな形であれ、それは機械が横にあるときもあれば、プリントが横にあるときもあるし。常に写真と一緒に生きてきたので、もうそれしかないという感じです。

(2024 年 6 月 6 日、清里フォトアートミュージアムにて収録)